

延縄漁業のチャネルキャットフィッシュ釣獲率と操業動態

三枝 仁

1. 目 的

南湖および瀬田川において、チャネルキャットフィッシュの捕獲数が増加する傾向にある。一方で、現時点では琵琶湖における生息量は低位な状態であると考えられ、数少ない個体を効率よく捕獲する方法を検討する必要がある。

そこで、本種の捕獲方法として有効とされる延縄について、瀬田川での釣獲率の傾向と南湖における操業実態を整理した。

2. 方 法

検討に使用したデータは、洗堰下流側の瀬田川で延縄を操業する漁業者1名と主に南湖において延縄を操業する漁業者4名にそれぞれ記入を依頼した漁獲日誌および聞き取りの記録を用いた。なお、瀬田川においては2014年から2018年までを、南湖については2015年から2018年までのものを用いた。

3. 結 果

本種が既に定着しているとみられる瀬田川で操業された延縄の針100本あたりの捕獲尾数（釣獲率）を月ごとに集計したところ、年によって操業のなかった月が見られたものの、概ね4月ないし5月に釣獲率が高く、その後6月に減少したのち、9月から10月頃に再び高い値となる二峰型の傾向が見られた（図1）。これは、本種が6月から7月頃に産卵期を迎え、営巣することに伴って摂餌行動が低調となる生態に関係していると推察され、他水域における先行研究での報告とも符合していた。

一方、南湖において操業された延縄ののべ使用針数を月ごとに集計したところ、いずれの年も5月が突出して高く、合計約10,000本の針数が操業されていたが、それ以外の月では顕著なピークは見られなかった（図2）。

これは、南湖で延縄を操業する漁業者において、複数の漁業種を季節に応じて操業している実態が表れており、4月まで操業する漁業種と6月以降に始まる漁業種との間を埋める形で延縄が操業される形態が多いことが窺えた。

これらのことから、本種の南湖への侵入阻止に向けて延縄を活用する場合には、既存の操業では使用針数が少なく、かつ釣獲率が高い4月および9月から10月にかけての操業を強化することが望ましいと考えられた。

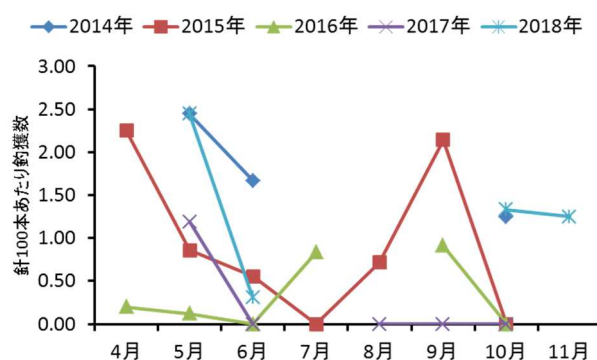


図1 瀬田川での延縄における釣獲率

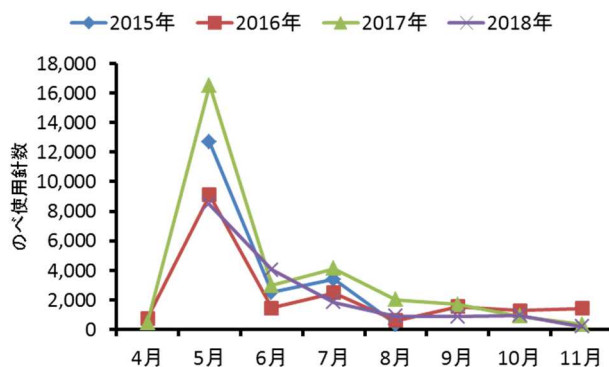


図2 南湖での延縄漁業操業の傾向